鎮守の森の過去・現在・未来

～そこが知りたい社叢学～

女性宮司の社叢再生の足跡

NPO法人 社叢学会 理事
大阪産業大学大学院教授　前迫 ゆり

地域と歩みだす八重垣神社の姿

仙台駅から常磐線に乗り換へて一級河川・阿武隈川をわたる。令和四年五月、山元駅に降り立つと、薩波祥子宮司がにこやかに出迎へてくださった。震災後、内陸側に移設された駅周辺はかつての原野ではなく、新緑の田園が広がり、山裾まで多くの家が建ってゐた。

宮城県亘理郡山元町の八重垣神社を初めて訪れたのは平成二十四年七月であったが、十年といふ歳月をかけてまちが活気を取り戻してゐることを感じた。

写真2　八重垣神社の祭事（天王まつり）。海岸まで神輿を担ぐ（平成29年7月撮影）〈山元町役場提供〉

震災の翌年、境内に植栽された一対のサカキ（榊）と、流されずに凛と生育するクロマツ（黒松）が印象的であった（写真1②）。この神社は大同二年（八〇七）に創祀された旧村社、主祭神は神速素盞嗚尊である。海からわづか数百メートルと海岸に近いことから、今も「災害危険区域」に指定されてをり、神社周辺には流されなかった数件の家と原野と田園が広がってゐる。

写真1①　被災前の本殿〈山元町役場提供〉

写真1②　社殿が流された境内。社殿跡に一対のサカキが植栽された（平成25年10月撮影）

クロマツと祭事

神社再興にとって祭礼は神社のみならず、人と人をつなぎ、地域をも活性化する。神社から笠野海岸まで若者が神輿を担ぐ夏祭りは震災の翌年から実施された（写真2）。この二年はコロナ禍で中止され、令和四年も議論の末、全面開催は見送ることになったさうだ。祭礼には地域内外から千人を超える人々が集まる。

海岸の防潮堤は震災以降、幅が広く高いものとなり、海岸線にはテトラポットが置かれてゐる。残念ではあるが笠野海岸の砂浜は減ってしまひ、残るわづかな砂浜は美しい白砂である。若者が神輿を担ぎ、神社から海までの数百メートルの「おさがり道」をゆく。この夏祭りは人々の心をも揺さぶる。

海岸林形成の歴史をたどると、慶長年間（一五九六―一六一五）に遡る。伊達藩の砂防林植栽は日本のなかでも先駆け的事例。海岸のクロマツ林は人々の暮らしと東北太平洋岸の景観に重要な役割を果たしてきた。津波で多くの植栽クロマツは流されたが、海岸のクロマツ林は減災に貢献したといふデータが報告されてゐる。海岸のクロマツは飛砂を防止するなど、人々の日々の暮らしを支へてきた。

写真1③　平成29年に建てられた社殿と神木のクロマツ（令和4年5月撮影）

宮司によると、昭和後期（およそ三十～四十年前）まで、松葉はダイヤのやうに束ねて縄で結び、竈などの燃料にされた。境内の松葉や松かさも、地域の人々が落ちるのを待って待って行ったため、松葉を掃いたことがなかったと語る。つまり、クロマツは地域景観としての美しさはもとより、当時の人々にとっては生活必需品でもあった。

海岸の防潮堤に立つと、遠くに八重垣神社のクロマツ、そしてクロマツの「ヤグネ（居久根）」を望むことができる。境内には今もおよそ十本のクロマツが残るが、新しく建った社殿の北西側にある神木のクロマツは幹周二・九六メートル、樹高二十メートルを超える（写真1③）。宮司のお話によると、クロマツは冬期に海岸からの潮風を受ける厳しい環境のためか年輪幅は狭く、かつて伐られたクロマツの年輪は、およそ四百年以上を数へたといふ。八重垣神社創祀から千二百年以上経つが、この神木のクロマツも長い歳月を神社とともに生き抜いてきたのである。

社叢と社殿再生

震災直後から薩波宮司の思ひは、社殿再建と社叢再生にあった。日本財団の補助金による「いのちの森　鎮守の森プロジェクト」によって植樹は震災翌年の平成二十四年にスタート。二十八年夏、三度この神社を訪れると、植樹された森は生長し、仮社務所と仮社殿が構築されてゐた。五年の歳月をかけて精力的に動かれた宮司の御奮闘が目に浮かぶやうである。新社殿は六月に地鎮祭がおこなはれ、二十九年七月に完成した（写真1③）。

令和四年五月、社殿にあがらせていただくと、建築から五年建ってゐるとは思へないほど、青森ヒバ（檜葉）のよい香りがした。その一方、銅板葺きの屋根や外壁はすでに風格が漂ふ色合ひに変化。東北の強い北風と飛砂のなせる技であらう。金具は金が使用されてをり、外壁の風雪に晒された風合ひとは不釣り合ひなほど、黄金に輝いてゐた。

震災前の社殿（写真1①）はケヤキ（欅）材が使用されてゐて、細工も凝ってゐた。新社殿は、本殿と拝殿がつながる設計である。かつての社殿と建築様式は異なるものの、このやうな荘厳な社殿を考案された設計者とそれを構築された宮大工のみなさまに敬意を表したい。

社殿建築にあたっては国宝・大崎八幡宮宮司のお力添へがあった。震災以降、一番して社叢と社殿の再生に取り組まれた薩波宮司の原動力は、圧倒的なバイタリティとそれを支へる神社関係者と地域の人々との信頼関係の賜といへるだらう。

これからの社叢

八重垣神社は海岸の砂浜の延長線上に建つ神社であり、震災前、境内は水はけのよい砂地であった。クロマツが順調に生長した所以でもあるだらう。第一回「みんなの鎮守の森植樹祭」（日本財団共催・日本文化興隆財団事業協力）は、氏子さんとボランティア五百三十人が参加して、平成二十四年六月二十四日におこなはれた。

宮脇昭博士の植栽手法により、将来、クロマツ林ではなく、タブノキ（椨）林が社叢の中核となることを想定してタブノキ、ヤブツバキ（藪椿）、シラカシ（白樫）、トベラ（海桐花）などの常緑広葉樹、コナラ（小楢）、ムラサキシキブ（紫式部）などの落葉広葉樹など計二十一種類を植栽。境内を取り囲むやうに植栽マウンドが設置されてゐる。マウンドには良質な土壌が使用されたことから、樹木の生長は順調である（写真3①）。

京都御所から平成二十九年に数百本のアカマツ（赤松）苗が献木され、植栽された。宮司に尋ねると、積雪は年に数回、数センチ程度とのこと。海風と北西の強い季節風が心配されたが、内陸育ちのマツ苗の生長は極めて良好である。今後、樹木同士の競争が働き、かなりの樹木は淘汰されていくであらう。社叢は公園緑地や里山とはまったく異なり、地域の気候と風土に育まれた社叢になるまでには長い時間を要する。

積雪や乾燥による枯死、強風による幹折れなど、地域の気候によって自然は大きなエネルギーで動く。そのエネルギーに対して社叢の動態を見守り、その変化に対して順応的な対応を考へることが必要である。流されずに残ったクロマツ、良好な生長をつづける植栽された「鎮守の森」、そして薩波宮司の笑顔からこの地域の自然と人の調和がみえた。

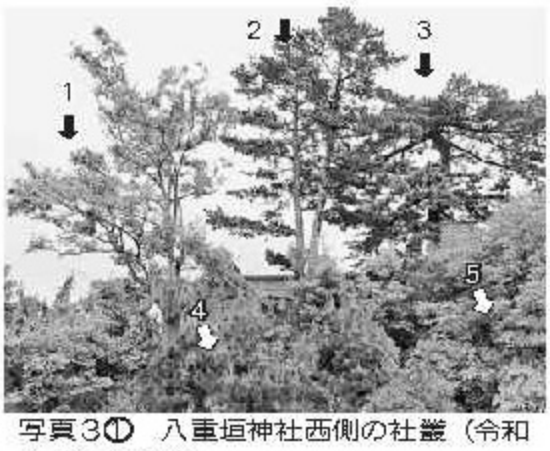

写真3①　八重垣神社西側の社叢（令和4年5月撮影）

1　震災前から生育してゐたエノキ
2　震災前から生育してゐたクロマツ
3　神木のクロマツ（幹周3.[illegible]m）
4　京都御所から平成29年に献木されたアカマツ
5　植栽されたタブノキ

写真3②　平成28年8月時点での北西の植生マウンド（境内側から撮影）。厳しい季節風のためか若干、生育不良であった

1　写真3①のエノキ